

一般 7 「上顎炎：体外衝撃波」

2月3日(金) 9:05~9:35
第3会場(山形テルサ 3F アプローチ)

Japanese Oral Session 7 "Epicondylitis, Shock Wave"

Feb. 3rd (Fri) 9:05~9:35
Room 3 (Yamagata Terrsa 3F Applause)

O7-1

難治性上腕骨外側上顎炎に対する体外衝撃波療法の短期成績

喜友名 翼¹、高橋 憲正¹、松本 圭介¹、佐々木 裕¹、上田 祐輔¹、星加 昭太¹、濱田 博成¹、
松葉 友幸¹、上條 秀樹¹、菅谷 啓之²

¹船橋整形外科病院、²東京スポーツ&整形外科クリニック

Short term outcome of extracorporeal shock wave therapy for lateral epicondylitis of elbow

Tasuku Kiyuna¹, Norimasa Takahashi¹, Keisuke Matsuki¹, Yu Sasaki¹, Yusuke Ueda¹,
Shota Hoshika¹, Hiroshige Hamada¹, Tomoyuki Matsuba¹, Hideki Kamijo¹, Hiroyuki Sugaya²

¹Sports Medicine & Joint Center, Funabashi Orthopaedic Hospital,

²Tokyo Sports & Orthopaedic Clinic

【はじめに】

難治性の上腕骨外側上顎炎に対する体外衝撃波療法(以下ESWT)は1995年に有用性が報告されているが、無効との報告もありその効果は確立されていない。本邦においては、保険適応がなく我々は2008年より無償で行ってきた。2021年4月より当院系列施設で自由診療としてESWTを開始したのでその成績を報告する。

【方法】

6ヵ月以上の罹病期間を有し、治療後3ヵ月以上経過観察可能であった17肘(男性12、女性5例)を対象とした。Q-DASHの機能障害/症状スコア、Nirschlの成績評価、ESWT後の手術の有無を調査した。ESWTは1~2週間隔で3回照射を原則とした。統計学的検定は対応のあるt検定を使用した。

【結果】

平均年齢は53.8歳(36-71)、平均罹病期間は27.4ヵ月(6-156)、平均照射回数は2.8(1-4)回、1回あたりの平均エネルギーは0.137mJ/mm²であった。また、照射回数が3回以上の症例が12例、3回未満が5例であった。平均Q-DASHスコアは、ESWT施行前30点、施行15点と有意に改善した(p<0.0001)。またNirschlの成績評価では優が2人、良が6人、可が8人、不可が1人であった。3肘(17.6%)に手術を要した。

【結語】

難治性上腕骨外側上顎炎に対するESWTにより臨床スコアは有意な改善を認めた。一方で17例中3例に手術を要した。自由診療でのESWTは照射回数に制限があり、十分な効果が得られなかった可能性がある。

一般 7 「上顎炎：体外衝撃波」

2月3日(金) 9:05~9:35
第3会場 (山形テルサ 3F アプローチ)

Japanese Oral Session 7 "Epicondylitis, Shock Wave"

Feb. 3rd (Fri) 9:05~9:35
Room 3 (Yamagata Terrsa 3F Applause)

O7-2

難治性上腕骨外側上顎炎に対する集束型体外衝撃波治療の除痛効果とMRI所見との関連性

坂井 周一郎、光井 康博、宮本 梓、樋口 一斗、吉田 禄彦、原 光司、石井 英樹
百武整形外科スポーツクリニック

Effects of focused shock wave for chronic lateral epicondylitis in relation to MRI findings

Shuichiro Sakai, Yasuhiro Mitsui, Azusa Miyamoto, Kazuto Higuchi, Toshihiko Yoshida, Kozi Hara, Hideki Ishii
Hyakutake Orthopedic Sports Clinic

【はじめに】

MRIを用いた上腕骨外側上顎炎(LE)の報告では、Common extensor tendon (CET) 起始部の損傷が疼痛に関連するとされている。しかし、集束型体外衝撃波治療(FSW)の治療効果にMRI画像評価を用いた報告はない。そこで今回、治療前のMRI所見がFSWの疼痛改善率に与える影響を調査したので報告する。

【対象と方法】

対象は2017年9月から2022年1月までに難治性LEと診断されFSWを行った68例68肘とした。FSWは2週に1回、合計9回行った。治療前MRI画像評価(STIR)によるCET起始部を軽度から重度の3段階で分類した。更にCET表層の高輝度変化の有無にも着目した。疼痛評価はThomsen test時の動作時痛(MP)と圧痛(TP)とし、FSW9回終了時の疼痛改善率を算出した。重回帰分析を用い、疼痛改善率に影響する因子としてMRI所見との関連性を検討した。

【結果】

重回帰分析ではMP改善率、TP改善率ともにMRIにおけるCET表層の高輝度変化が寄与する因子として抽出された(共に $P<0.01$)。CET起始部の重症度との関連性は認めなかった。修正済み決定係数はMP改善率が0.48、TP改善率は0.32であった。

【考察】

本研究においてMRIにおけるCET表層の高輝度変化と疼痛改善率に相関を認めた。難治性LEにおける疼痛の誘発部位はCET起始部の損傷程度ではなく、CET表層の高輝度変化が関連している事が示唆された。

一般7「上顎炎：体外衝撃波」

2月3日(金) 9:05～9:35
第3会場(山形テルサ 3F アプロース)

Japanese Oral Session 7 "Epicondylitis, Shock Wave"

Feb. 3rd (Fri) 9:05～9:35
Room 3 (Yamagata Terrsa 3F Applause)

07-3

上腕骨外側上顎炎に対する対外衝撃波の治療効果に影響する因子について ～患者背景による比較～

彌富 雅信、小松 智、荻本 晋作、峯 博子、井上 美帆、鶴田 敏幸
鶴田整形外科

Investigation of factors that affect the clinical outcome of ESWT for lateral epicondylitis

Masanobu Iyadomi, Satoshi Komatsu, Shinsaku Ogimoto, Hiroko Mine, Miho Inoue,
Toshiyuki Tsuruta
Tsuruta Orthopaedic Clinic

【目的】上腕骨外側上顎炎(LE)における集束型体外衝撃波療法(以下ESWT)には一定の治療効果が報告されているが、その適応範囲については明確ではない。本研究は治療良好群と不良群を比較し、患者背景について調査した。

【対象と方法】LEに対しESWTを施行した205例のうち、ESWTを3回以上施行した144例165肘。平均年齢 53.3 ± 10.2 歳、男性91肘 女性74肘。軽快終了した患者を成績良好群、変化なしを不良群と定義し、患者背景である年齢、性別、利き手、職業、初診時・最終NRS、罹病期間、照射回数について比較した。

【結果】良好群と不良群の割合は 114 肘(69.1%) / 51 肘(30.9%)。2 群間比較(良好：不良)は、年齢 54.4 ± 10.3 歳 : 50.7 ± 9.6 歳、性別(男女比) (%) $54.4/45.6$: $56.9/43.1$ 、障害側(利き手 / 非利き手) (%) $62.3/37.7$: $74.5/25.5$ 、職業(肉体労働系 / 事務系 / 専業主婦 / 無職) (%) $67.5/24.6/3.5/4.4$: $82.4/7.8/0.0/9.8$ 、初診時NRS 5.7 ± 2.2 : 6.8 ± 2.1 、最終NRS 1.8 ± 1.5 : 5.0 ± 2.0 、罹病期間 4.8 ± 10.4 カ月 : 6.9 ± 10.2 カ月、照射回数 8.4 ± 2.5 回 : 8.1 ± 3.1 回。年齢、職業(良好群事務系 / 多)、初診時・最終NRSの両群間に有意差を認めた。

【考察】LEに対するESWTで疼痛軽減が得られたのは約7割であり、罹病期間よりも年齢、職業、初診時NRSが、治療効果に影響する可能性が示唆された。